

琉球語の動詞活用形の歴史的変化

狩俣繁久¹

1. はじめに

琉球語は、北琉球語と南琉球語の二つの下位言語に区分される。南・北琉球語は、音韻、文法、語彙のいずれの面においても大きな違いがある。

ここでは、北琉球語の那覇市首里方言、南琉球語の宮古島市上野字野原方言、石垣島石垣方言に、1531年に琉球王府によって第一巻が刊行された『おもろさうし』の言語（以下、オモロ語²）について、子音語幹の強変化動詞、母音語幹の弱変化動詞、子音語幹と母音語幹の活用形が並存する混合変化動詞、および、「有り」「居り」「する」「来る」の動詞を比較して共通性と差異性を検討し北琉球語と南琉球語の違いを生みだすのに九州方言が大きな影響を与えていることを論じる。

2. 完成相の活用形

完成相の活用形は、北琉球語と南琉球語で大きく異なる。その一つが断定形非過去形の語構成である。

表 1. 完成相の強変化動詞「聞く」の活用形

			オモロ語	首里方言	上野方言	石垣方言
終 止 形	断 定 形	非過去	kiku/kiki	tʃitʃuN	ksks	sʃikuN
		過去	kitʃamu/kitʃi	tʃitʃaN /tʃitʃutaN ³	ksksta:	sʃkuda/sʃkudaru
	命令形		kiki	tʃiki/tʃike:	kski	sʃki/sʃkja
	意志勧誘系		kika	tʃika	kskadi	sʃka
連 体 形	非過去	kiku/kiko	tʃitʃuru	ksks	sʃku	
	過去	kitʃaru	tʃitʃaru /tʃitʃutaru	ksksta:	sʃkudaru	
中止形			kitʃi /kikijari	tʃitʃi /tʃitʃa:i	kski:	sʃki:

表 2. 完成相の混合変化動詞「下りる⁴」の活用形

			オモロ語	首里方言	野原方言	石垣方言
終 止 形	断 定 形	非過去	oriru/ori	uri:N	uri	uriN/uriruN
		過去	oritaru/oritī	uritaN /uri.taN	urita:	urida/uridaru
	命令形		oriri	uriri/urire:	uriru	uriri/ukirja
	意志勧誘系		orira	urira	uridi	uri

1 琉球大学 島嶼地域科学研究所。

2 仮名文字で表記されている『おもろさうし』を高橋俊三 (1991b) と服部四郎 (1978~1979) に基づいて当時の音価を推定した簡略的な音韻記号で表記する。オ段の音節はウ段に統合していたが、オ段のままのものあり、完全に統合していない。オ段の仮名で書かれているものはoで表記する。エ段の音節の一部はイ段に統合していたが、多くの行でエ段とイ段の書き分けがある。エ段の母音はiで表記する。

3 首里方言の完成相終止形と連体形には第一過去形と第二過去形の二つの過去形がある。

4 「降る」「満つ」などの上二段型の混合変化は、琉球語全体で「降れる」「満てる」のような下二段型の弱変化で現れる。

連 体 形	非過去	oriru	uri:ru	uri:	uriru
	過去	oritaru	uritaru /uri:taru	urita:	uridaru
中止形		oriti /orijari	uriti /urija:i	uri:	ure:

2. 融合型と非融合型

首里方言の断定形の非過去形と第二過去形、連体形の非過去形と第二過去形は、連用形に uN (居る) が融合した形式 (以下、融合型) である。

kiki・uN>kikiuN>kikjuN>tjitfuN (聞く)
kiki・utaN>kikiutaN>kikjutaN>tjitfutaN (聞いた)
kiki・uru>kikiuru>kikjuru>tjitfuru (聞く)
kiki・utaru>kikiutaru>kikjutaru>tjitfutaru (聞いた)

いっぽう、第一過去形、命令形、勧誘形、連体形の第一過去形、中止形は、uN (居る) が融合しない形式 (以下、非融合型) である。

kiki・te・aN>kiitfiaN>tjitfaN (聞く)
kiki・te・aru>kiitfiaru>tjitfaru (聞いた)
kike>tjiki (聞け)
kikamu>kika>tjika (聞こう)
kikite>kiitje>kitji>tjitji (聞いて)

首里方言の完成相は、融合型と非融合型の活用形が混在している。それは条件形などの他の形式でも同様である。首里方言の融合型の活用形は、西日本方言および九州方言の進行相を表す形式 (以下、シヨル形式) に対応する。

いっぽう、オモロ語、野原方言、石垣方言には非融合型の活用形しか見られない。なお、石垣方言の非過去形の音声形式は、首里方言のそれに似るが、後述するようにスル対応形あるいはシ中止形に N のついたもので、石垣方言の活用形⁵は、オモロ語、野原方言と同じく非融合型である。首里方言と他の三つが異なる。

表 3. 完成相の活用形

北琉球語		南琉球語	
オモロ語 ⁶	沖縄方言	宮古方言	八重山方言
非融合	非融合・融合の混在	非融合	非融合

3. 非過去形

非過去形が古代日本語のどの形式に対応しているかをみる⁷。

⁵ 詳細は鈴木重幸 1999 を参照。

⁶ かりまた (2016) で沖縄方言と『おもろさうし』の過去形やシテ中止形の音便について論じた。

⁷ 古代日本語の完成相非過去形に対応する形をス対応形、連体形非過去形に対応する形をスル対応形、シ中止形に対応する形をシ対応形とよぶ。

(A) 強変化と弱変化の非過去形と連体形「読む」「見る」は同音で、シ中止形「読み」「見」と異なる。

(B) 混合変化と不規則変化の非過去「起く」「投ぐ」「死ぬ」「す」「来」は、連体形「起くる」「投ぐる」「死ぬる」「する」「来る」とも、シ中止形「起き」「投げ」「死に」「来」「し」とも異なる。

首里方言の非過去形も連体形も融合型で、古代日本語と対応を確認できない。

強変化は、ス対応形とスル対応形が同音になるため、オモロ語の非過去形も連体形もいずれに対応するのか特定できない。オモロ語の混合変化と不規則「する」の非過去形にス対応形はみられず、スル対応形が現れる。弱変化は用例が少なく、スル対応形の連体形しか確認できない。「有り」、「居り」の非過去形は、シ対応形もスル対応形も現れる。「来る」の非過去形は確認できないが、連体形にはスル対応形が現れる。

- (1) 又とぎゃわ いよ つく。いぎよも たこ つく。
 (銚は 魚を 突く。銚も 蛸を 突く。) 15-1100
- (2) R かつれんわ なおにぎや たとゑる。やまとの かまくらに たとゑる。
 (勝連は 何にか 譬える。大和の 鎌倉に 譬える。) 16-1144
- (3) R かぐらの けおのうちに ある。
 (神座の 京の内(聖地)に 有る。) 4-158

オモロ語には「有り」、「居り」以外の動詞の非過去形にもシ対応形が現れる。シ対応形の例は、スル対応形の10倍の数がある。

- (4) R けよも あちやも おみきやうよ おがむすが まさり。
 (今日も 明日も お顔を 拝むのが 勝る。) 7-389
- (5) R もゝまがり つみあげて かはらよせ御ぐすく げらへ。
 (百曲りを 積み上げて 珈波羅寄せ城を 造る。) 13-870

表 4. オモロ語の非過去と連体形

		非過去		連体形
		スル対応形	シ対応形	スル対応形
強変化	突く	tsuku	tsuki	kiku/kiko
	鳴響み	tojomu	tojomi	tojomu/tojomo
	選ぶ	irabu	irabi	irabu
	勝る	masaru	masari	masaru/masaro
	添う	osou	osoi	osou/osoo
混合変化	聞こえる	kikoiru	kikoi	kikoiru
	孵でる	sudiru	sudī	sudīru
不規則	有る	aru	ari	aru
	居る	woru	wori	wori
	する	suru	—	suru
	来る	—	—	kuru

野原方言の不規則「有る」、「居る」以外は、非過去形と強調形とシ中止形⁸が同音である。

表 5. 野原方言の非過去形

		非過去形		連体形	
		スル対応形	シ対応形	スル対応形	シ対応形
強変化	書く		kaks		kaks

⁸ シ中止形は、numbuska: (飲みたい)、numta: (飲んだ) などのように単語作り、形作りの要素となる。

	漕ぐ		kugz		kugz
	飛び		tubz		tubz
	買う	ko:		ko:	
	飲む	num		num	
	取る	tuz		tuz	
	勝つ	kats		kats	
	落とす	utus		utus	
	死ぬ	sn		sn	
混合変化	起ける		uki		uki
	分ける		baki		baki
	捨てる		sti		sti
	考える		kangai		kangai
	覚える		ubui		ubui
弱変化	見る		mi:		mi:
	煮る		ni:		ni:
不規則	有る	a:		a:	
	居る	u:		u:	
	する	ss		ss	
			kss		kss

野原方言の非過去形は次のようになる。

- (6) 混合変化は、非過去形と連体形が同音で、シ対応形である。
- (7) k 動詞、g 動詞、b 動詞、弱変化の非過去形と連体形は、シ対応形である。
- (8) w 動詞は、ス対応形あるいはスル対応形である。
- (9) m 動詞、s 動詞、t 動詞、r 動詞、sn (死ぬ)、ss (する)、a: (有る)、u: (居る) は、シ対応形、ス対応形、スル対応形のいずれに由来するか判別できない。

石垣方言の強変化の非過去形は、スル対応形に N が後接している。混合変化と弱変化にはシ対応形に N の後接した語形とスル対応形に N の後接した語形がある。

- (10) unu macijaja aQca:ja zju:ziNga akuN. (その店は明日十時に開く。)
- (11) tara:ja aQca rokuziNga madu akiN/akiruN. (太郎は明日六時に窓を開ける。)
- (12) naNkara bideo mi:N/mi:ruN. (今からビデオを見る。)

表 6. 石垣方言の非過去形

		非過去形		連体形	
		スル対応形	シ対応形	スル対応形	シ対応形
強変化	開く	akuN		aku	
	飲む	numuN		numu	
	飛ぶ	tubuN		tubu	
	取る	туруN		туру	
	勝つ	kacuN		kacu	
	落とす	utasiN		utasi	

	買う	kauN		kau	
	死ぬ	sīnuN		sīnu	
混合変化	起ける	ukiruN	ukiN		uki
	開ける	akiruN	akiN		aki
	落てる	utiruN	utiN		uti
	考える	kaNgairuN	kaNgaiN		kaNgai
	覚える	ubuiruN	ubuiN		ubui
弱変化	見る	mi:ruN	mi:N		mi:
	似る	ni:ruN	ni:N		ni:
不規則	有る	aN		arī	
	居る	uN		urī	
	する		sīN		sī:
	来る		kīN		kī:

石垣方言の非過去形から N を除いた形は、次のようになる。

- (13) 混合変化と弱変化の二つの形式は、シ対応形とスル対応形である。
- (14) 不規則 sī: 、kī: は、シ対応形である。
- (15) 不規則 arī、urī、強変化 s 動詞は、シ対応形あるいはスル対応形である。
- (16) 不規則 arī、urī は対応形が不明である。
- (17) k 動詞、r 動詞、t 動詞は、ス対応形あるいはスル対応形である。
- (18) 強変化の m 動詞、b 動詞、w 動詞はス対応形あるいはスル対応形である。

非過去形のまとめ

九州方言系のシヨル形が完成相になっていて、古代語との対応関係が不明な首里方言を除いたオモロ語、野原方言、石垣方言の非過去形は、次の三つに分けられる。

- (1) シ対応形に対応する動詞
- (2) ス対応形あるいはスル対応形のいずれに対応するか判別できない動詞
- (3) シ対応形、ス対応形、スル対応形のいずれに対応するか判別できない動詞

オモロ語にス対応形がみられない。野原方言にも石垣方言にもス対応形だと確定できるものはない。以上のことから、野原方言と石垣方言のス対応形あるいはスル対応形のいずれに対応するか判別できない活用形をスル対応形と見ることができる。

表 7. 非過去形の対応形式

	北琉球語		南琉球語	
	オモロ語	首里方言	野原方言	石垣方言
強変化	シ and スル	—	シ or スル	スル
弱変化	シ and スル	—	シ	シ and スル
混合変化	シ and スル	—	シ	シ and スル
カ変	—	—	シ	シ
サ変	スル	—	シ or スル	シ

4. 過去形—音便の有無

北琉球語の首里方言には音便があるが、南琉球語の野原方言と石垣方言には音便がないのである。音便の有無は、琉球語の活用形に見られる最も大きな南北差の一つである。

4.1 オモロ語と首里方言の過去形

オモロ語にはシタリ過去形のほかに、シテ過去形がある。文末に現れて過去を表すシテ過去形⁹はシテ中止形と同音である。オモロ語で用例の多いシテ中止形と首里方言のシテ中止形の音便を検討する。

- (19) 又 かみにしやが やしろたび のぼて。(神にしやが山城旅に上った。)
 又 やしろたび なお かいが のぼてが。(山城旅、何を買いに上ったか。)
 又 あおしやてうだま かいが のぼて。(青しやてう玉を買いに上った。) 21-1497

オモロ語と首里方言を並べて、首里方言とオモロ語の音便の状況を見る。

表 8 北琉球語の音便

		オモロ語	首里方言	
強変化	積んで	tsudi	tʃidi	脱落音便
	遊んで	asudi	ʔaʃidi	
	死んで		ʃidzi	
	抱いて	datʃi ¹⁰	datʃi	
	出して	idʒatʃi	ʔNdʒatʃi	
	漕いで	kodʒi	kudʒi	
	願って	nigati	Nigati	
	乗って	noti	nuti	
不規則	有って	ati	ʔati	脱落音便
	居て	oti	uti	
強変化	討って	utʃitʃi	ʔuttʃi	促音便
混合	立て	tatiti	tatiti	音便無
	下りて	oriti	ʔuriti	
弱変化	見て	mitʃi	N:tʃi	
不規則	来て	kitʃi	tʃi	
	して	ʃitʃi	ʃi	

- (20) m 動詞、b 動詞は、撥音便になり、のちに撥音が音消失して脱落音便になった。
 (21) r 動詞は、促音便になり、のちに促音が音消失して脱落音便になった。
 (22) w 動詞は、ウ音便になり、のちに u が音消失して脱落音便になった。
 (23) 強変化化した首里方言の n 動詞 ʃidzi (死んで) は、撥音便と脱落音便ののち、語頭の先行母音 i の影響で *t が破擦音化¹¹した語形である。

⁹ 首里方言ではシテ中止形に質問の意を表す助辞 i の後接した過去の肯否質問形が現れる：huzisanuNkai nubuti: (富士山に登ったか。) / saki nudi:. (酒を飲んだか。)

¹⁰ オモロ語では、いまや imja < ima (今)、みきゃ mikja < mika (三日)、izjete いぢえて < idete (出て) のように、前舌狭母音 i に後続する子音が規則的に口蓋音化し、さらに破裂音 t は破擦音化する。

¹¹ この破擦音化は、前舌狭母音 i による後続子音の規則的な音韻変化である。k 動詞、s 動詞、g 動詞、t 動詞、*iri 動詞、不規則「きちゑ」、「しちゑ」の *t の破擦音化も同じ規則的な音韻変化であり、*t の有声音化、

- (24) k 動詞、s 動詞は、イ音便になって*tを破擦音化させたのちに、脱落音便になった。
- (25) g 動詞は、イ音便化し、*tを有声音化、破擦音化させたのち、脱落音便になった。
- (26) 不規則「あて」「おて」はr 動詞と同じ促音便と脱落音便がおきている。
- (27) 脱落音便はオモロ以前にあり、それ以降の音便は脱落しない。
- (28) 弱変化、混合変化には、音便がみられない。
- (29) t 動詞は、オモロの時代に*tの破擦音化はあるが、音便は起きていない。首里方言で促音が発生しているが、他の音便とは異なる。
- (30) 不規則「して」「来て」に音便はないが、首里方言の語頭の促音は音便ではなく、hito > Qcju (人) にみるような狭母音の音消失に伴う音韻変化である。

4.2 野原方言と石垣方言の過去形

野原方言は、動詞の活用のタイプを問わず、過去形の語尾には、*tari の末尾の z の弱化した ta: が現れる。オモロ語、首里方言にみられるイ音便も撥音便も促音便も脱落音便もみられない¹²。

石垣方言は、動詞の活用のタイプを問わず、過去形の語尾には、*tari あるいは*taru に由来する dari あるいは da が現れ、音便はみられない。da は dari の末尾の ri の消失したもので、da の形がよく現れる。

表9 野原方言と石垣方言の過去形

		野原方言	石垣方言
音便無し	開いた	aksta:	akudari
	出した	idasta:	idasidari
	漕いだ	kugzta:	kugudari
	買った	ko:ta:	kaudari
	飲んだ	numta:	numudari~nuNdari
	飛んだ	tubzta:	tubudari
	死んだ	snta:	sinudari~siNdari
	取った	tuzta:	turidari
	有った	a:ta:	adari
	居った	u:ta:	udari
	打った	utsta:	ucudari
	切った	kssta:	kisidari
	開けた	akita:	akidari
	降りた	urita:	uridari
	見た	mi:ta:	mi:dari
	来た	ksta:	kī:dari~kītarī
	した	sta:	sī:dari~sītarī

4.3 音便のまとめ

オモロ語と首里方言には撥音便、イ音便、ウ音便、および脱落音便がみられるが、野原方言と石垣方言には音便がみられない。このことから、北琉球語の音便は、南琉球語が分岐したのちに起きたと考えることができる。しかも、『おもろさうし』が編纂される16世紀には

脱落音便（撥音、促音、*iなどの音消失）の形態音韻変化とは異なる。

12 *m 動詞のばあい、語尾頭母音 i の音消失はみられるが、これは宮古語一般にみられる音韻変化であり、撥音便ではない。

音便が進行しており、脱落音便も発生していた。日本の西南端に位置する南琉球語には音便がなく日本語、琉球語の古い特徴を保持する。

5. 完成相と継続相

オモロ語、首里方言、野原方言、石垣方言のアスペクト・テンス (AT) 体系は、完成相と継続相の二項対立だが、4者の形式の在り方は異なる。

	オモロ語	首里方言	野原方言	石垣方言
完成相	スル、シ	シヨル	スル、シ	スル、シ
継続相	シヨル	シトル	シアリオリ	シアリオリ

オモロ語の完成相はスル形で、継続相は、融合型のシヨル形である。

オモロ語の継続相のシヨル形は、形のうえでは西日本型だが、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞（以下、客体変化動詞）が主体の動作継続を表し、主体変化動詞が主体の変化結果の継続を表し、意味的には東日本型である。

- (31) 又 けお ふきよる かぜや とくかぜど ふきよる。
 (今日 吹いている 風は、疾風が 吹いている。) 8-421
- (32) R いみゃど 世わ まさる。てがねまる しま かねて きより。
 (今こそ 世は 勝る。冶金丸 (宝剣) が 島を 纏めて 来ている。) 8-420

首里方言の AT 体系も完成相と継続相の二項対立型である。完成相の形式は、西日本方言のシヨルに相当するが、意味的には未来のひとまとまりの動作や変化を表す¹³。

- (33) ?unu hono: ?acja:madine: jumuN. (その本は明日までには読む。)
 (34) jagati saburo:ga cju:N. (もうすぐ三郎が来る。)
 (35) ?acja:ja nu:ja ?ucikitiN ?icjuN. (明日は何をおいても行く。)

首里方言の継続相のシトル形は、シテ中止形に uN を結合させたもので、西日本方言のシトルに相当する。主体動作動詞と客体変化動詞のシトル形は、主体の動作継続を表し、主体変化動詞は、主体の変化結果の継続を表す。首里方言のシトル形は、形のうえでは西日本型だが、意味的には東日本型である。

- (36) warabinu kuci huraci niNto:N. (子どもが口を開けて寝ている。)

野原方言の AT 体系は、完成相と継続相の二項対立である¹⁴。アリ中止形に u: を結合させた継続相¹⁵は、動作継続と変化結果継続を表し、意味的には東日本型である。

- (37) jarabinudu parinu nako: azki: u:. (子どもが畑の中を歩いている。)
 (38) ku:mujanudu sni: u:. (ゴキブリが死んで いる。)

¹³ 鈴木 (1960) によれば、かつては主体動作動詞、客体変化動詞の場合でも進行を表したが、いまでは主体変化動詞にかぎられる。ス対応形あるいはスル対応形が失われ、シヨル形の完成相化が進行している。工藤 (2014) は首里方言を西日本方言と東日本方言の複合型とした。

¹⁴ 野原方言の AT 体系の詳細については、かりまた (2012) を参照。

¹⁵ snju:、azkju:、kja:rju: のような融合した形も現れる。

石垣方言も完成相と継続相の二項対立である¹⁶。主体動作動詞、客体変化動詞は、主体の動作継続を表し、主体変化動詞は主体の変化結果の継続を表す。意味的には東日本型である。

- (39) aQcja:ja gusi numiN. (父は酒を飲んでいる。)
(40) madunu akiN. (窓が開いている。)

AT 体系のまとめ

オモロ語の AT 体系は、東日本型の 2 項対立だが、継続相の形式は西日本系のシヨル形である。首里方言の AT 体系は、東日本型の 2 項対立だが、完成相と継続相の形式は、西日本系のシヨル形とシトル形である。

野原方言、石垣方言の AT 体系は、東日本型の 2 項対立だが、継続相は、西日本型の「居る」を文法化させた東日本型の継続相を表している。野原方言と石垣方言の継続相を形つくるアリ中止形は、琉球語固有の形で、アリ中止形を中核にする継続相は、シテ中止形を中核にする北琉球語と異なる。

6. 中止形

並列複文「A が～シテ、B が～する」やふたまた述語「A が～シテ～した」の従属文の述語になる中止形として、オモロ語と首里方言にはシテ中止形とアリ中止形の二つの形式があり、野原方言と石垣方言にはアリ中止形がある。

オモロ語と首里方言¹⁷のアリ中止形は、シ中止形 (soroi 揃え) にアリ (jari 有り) が組み合わせられたもので、複文の中止的な述語として使用される。

- (41) R とよむ 大きみや もゝしま そろへやり みおやせ。(名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。) 4-176
(42) 又きこゑおおきみぎゃ ゑか ゑらびやり おれわちへ。(聞得大君(神女)が吉日を選んで降り給いた。) 3-110

野原方言のアリ中止形は、一見するとシ中止形にみえる。しかし、野原方言には*e>i の変化があり、強変化の uki: (起きて)、sni: (死んで) などのアリ中止形の語尾の i は*e に遡るので、野原方言のアリ中止形をシ中止形と見ることはできない。石垣方言の弱変化のアリ中止形 mija: (見て)、kija: (着て) は、石垣方言のアリ中止形がオモロ語のアリ中止形を引き継いだものであることを支持する。

オモロ語や首里方言と野原方言や石垣方言とを繋ぐのが、語尾に e: をもつ沖縄北部の伊平屋島方言、伊是名島方言のアリ中止形である。伊平屋島方言、伊是名島方言のアリ中止形は複文の述語になるだけでなく、野原方言、石垣方言のように継続相などの形作りの要素になることもでき、生産性がある。伊平屋島方言、伊是名島方言のアリ中止形は、オモロ語と首里方言のアリ中止形が継続相などの派生形式を作る要素にも発展することを示す。

- (43) bo:si hauje: ?aQcjuN. (帽子をかぶって歩く。) 伊平屋島我喜屋方言
(44) hunu ?isi kije: Nri. (この石を蹴ってみる。) 伊平屋島我喜屋方言
(45) ?naNma ?aminu hujo:N. (今雨が降っている。) 伊是名島諸見方言

16 四箇方言の AT 体系については鈴木編 (2001) を参照。

17 首里方言のアリ中止形は、numa: i と numa: ni が現れるが、国立国語研究所編 (1963) によると、numa: i の方がより古い形式である。

第 10 表 アリ中止形

		オモロ	首里	伊是名	野原	石垣
強変化	引いて	hikijari	hitʃa:i	hitʃe:	pski:	hiki
	選んで	wirabijari	iraba:i	irane:	irabi:	irabi
	取って	torijari	tuja:i	tuje:	turi:	turi
	持って	motʃijari	mutʃa:i	mutʃe:	mutʃi:	mutʃi
	差して	safijari	sasa:i	safe:	safi:	safi
	乞うて	kojari	ku:ja:i	ku:je:	kui:	kui
混合変化	降りて	orijari	urija:i	urije:	uri:	ure:
	出て	idʒijari	Ndʒija:i	Ndʒije:	idi:	ide:
	揃えて	soroijari	suruija:i	suruje:	surui:	suruja:
弱変化	見て	mijari	N:dʒa:i	ne:	mi:	mija:
	煮て	—	ni:ja:i	ni:je:	ni:	nija:
	着て	kijari	tʃija:i	tʃije:	kʃʃi:	kija:
不規則変化	有って	ajari	aja:i	aje:	ari:	ari
	居て	ojari	uja:i	uje:	uri:	uri
	して	sijari	sa:i	ʃe:	si:	si:
	来て	kijari	tʃa:i	tʃe:	ki	ki:

- (46) オモロ語と首里方言には、九州方言と同じ音便化したシテ中止形のほかに、アリ中止形がある。
- (47) 首里方言のアリ中止形は、複文の述語にしか見られない。
- (48) 野原方言と石垣方言と伊平屋島、伊是名島の方言には、アリ中止形があるが、シテ中止形はない。
- (49) 野原方言と石垣方言と伊平屋島、伊是名島の方言のアリ中止形は、複文の述語にもアスペクト等の派生形式の要素にもなることができる。

なお、首里方言を含む沖縄中南部方言と伊平屋島方言、伊是名島方言以外の北琉球語にアリ中止形はほとんど見られない。

7. 南・北琉球語の言語差を生み出した要因

オモロ語、首里方言、野原方言、石垣方言の四つの言語の動詞活用形を比較し、その共通性と差異性を検討した。

- (50) AT 体系は、東日本方言型の 2 項対立である。
- (51) 音便のない古い活用形が野原方言、石垣方言に見られる。
- (52) ス形の欠如した完成相非過去（シ形、スル形）は、オモロ語に有り、野原方言と石垣方言に残っている。
- (53) 東日本型の 2 項対立の AT 体系のオモロ語に西日本系のシヨル形が入りこんでいる。意味的には進行相ではなく継続相。
- (54) 首里方言では完成相がシヨル形に、継続相がシトル形に替わった。
- (55) オモロ語と首里方言にあり、野原方言・石垣方言にない音便、シテ中止形、シヨル形、シトル形は、九州方言と共通のものである。

以上のことに加えて、五十嵐陽介（2017）が主張する南部九州・琉球語群を認め、それを

保持する人々が南下して琉球列島に拡散したとするなら、次の仮説が想定できる。

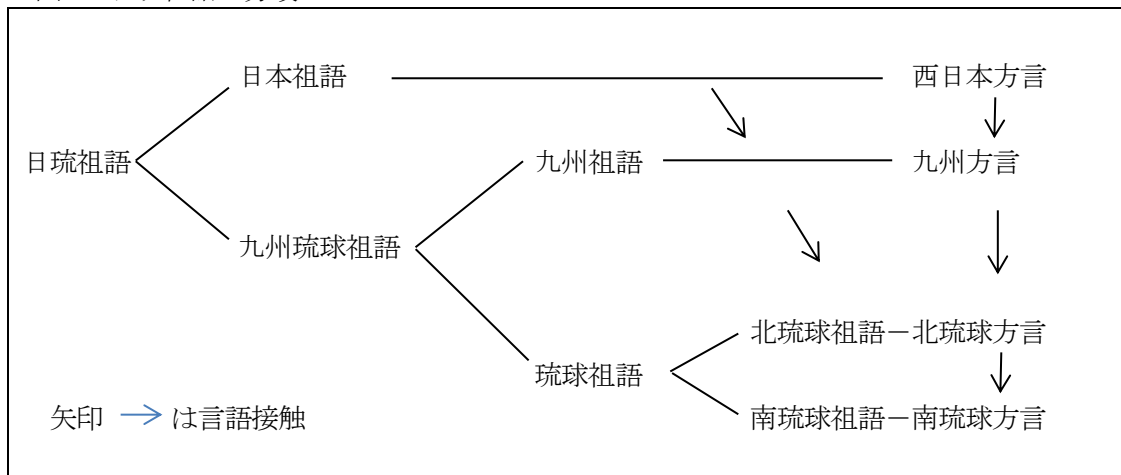
- (56) 南・北琉球語に共通の特徴は、南部九州・琉球語群から受け継いだものである。
- (57) 南琉球語に見られる特徴は、南部九州・琉球語群から受け継いだものである。
- (58) 南琉球語に見られず、北琉球語と九州方言に共通に見られる特徴は、南部九州・琉球語群から分岐した後に、九州方言からもたらされたものである。

以上のことから、南琉球語の特徴を有する言語集団の南琉球への移動・拡散と北琉球に九州方言的な要素を持ち込んだ言語集団の移動・拡散の、2 回の人々の移動があったことを想定できる。

下二段化した上二段動詞、2 項対立アスペクトは、(56) の特徴である。なお、焦点化助詞の *du* (ぞ) は日琉祖語から受け継いだもので、九州方言を含む本土諸方言で失われた。非音便の活用形、ス形の欠如した完成相の活用形は、(57) である。一部の北琉球語で保存されているアリ中止形もここに含まれる。音便の活用形と西日本型 3 項対立のシヨル形とシトル形は、(58) である。シテ中止形も (58) である。

狩俣繁久 (2019) では次のような分岐を描いた¹⁸。

図 1. 日琉祖語の分岐



※上の分岐は、五十嵐陽介 (2017) に従って一部変更する必要がある。

参考文献

五十嵐陽介 (2017) 「九州・琉球同源語調査票」一橋大学大学院五十嵐陽介ゼミ「終日ゼミ」
発表原稿、2017年9月12日

五十嵐陽介 (2016) 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか？—
「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」国際日本文化研究センター共同研究会
「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史の光と影」第3回共同研究
会、2016年8月31日、国際日本文化研究センター

狩俣繁久 (2019) 「琉球語の起源はどのように語られたか—琉球語と九州方言の関係を問う

¹⁸ 五十嵐陽介 (2017) は、「九州・琉球語派」の同源語を見出すための語彙を抜き出して検討し、「琉球語と姉妹関係にあるのは、南部九州語（鹿児島県を中心とした言語）である」として「南部九州・琉球語群」を想定している。ここでは五十嵐陽介 (2017) をふまえて論を進める。狩俣繁久 (2017) の九州方言の一部は、五十嵐陽介 (2017) の「南部九州語」を指すが、ここでは「九州方言」を使用する。

- ー)『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂(近刊)
- Shigehisa Karimata(2018)“The Linguistic Difference between Northern and Southern Ryukyuan from the Perspective of Human Movement”. *International Journal of Okinawan Studies* 9: 15-26.
- かりまたしげひさ(2016)「琉球諸語のアスペクト・テンス体系の形式」『琉球諸語と古代日本語ー日琉祖語の再建にむけて』, くろしお出版
- かりまたしげひさ(2015)「オモロ語の動詞終止形ー精密なよみをめざしてー」琉球大学法文学部紀要,『琉球アジア文化論集』創刊号、pp. 33~104.
- かりまたしげひさ(2012)「琉球宮古島野原方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード体系の概要」『琉球アジア社会文化研究』15号、pp.13~37、琉球大学琉球アジア文化研究会。
- 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト』. P.674、ひつじ書房。
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美(2007)「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシヤリティー」『大阪大学文学研究科紀要』第47集。pp151~183、
- 国立国語研究所編(1963)『沖縄語辞典』p.854、大蔵省印刷局
- 鈴木重幸編(2001)『琉球八重山方言の動詞の研究ー石垣方言の動詞のアスペクトとテンス(中間報告)ー』p100、科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書
- 鈴木重幸(1960)「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』第41号、国語学会
- 高橋俊三(1991a)『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院
- 高橋俊三(1991b)『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院
- トマ・ペラール(2016)「日琉祖語の分岐年代」田窪・ホイットマン・平子編『琉球諸語と古代日本語ー日琉祖語の再建にむけて』くろしお出版
- 服部四郎(1976)「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明』沖縄文化協会
- 服部四郎(1978~1979)「日本祖語について 1」~「日本祖語について 22」『月刊言語』大修館書店

付記：本稿は JSPS 科研費 17H06115 (基盤研究(S)「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」、琉球大学学長リーダーシッププロジェクト研究「琉球諸語における「動的」言語系統樹システムの構築をめざして」)の研究成果の一部である。

なお、本稿は、Shigehisa Karimata(2018)の主張に従って、かりまたしげひさ(2016)の内容を書き直したものである。